

中世フィレンツェの都市建設 (I)

森田 義之

Lo sviluppo urbanistico a Firenze nel Medioevo (I)

La città di Firenze, d'origine romana (fondata nel 59 A. C.), si sviluppò radicalmente nel Due-Trecento e stabilì la sua *forma urbis* che durava fino all'Età moderna.

Dopo lunga decadenza della vita civile durante l'Alto Medioevo,

Firenze cominciò a risorgere ed espandersi come città comunale alla fine del XI secolo. La prima espansione delle mura fu del 1173-75.

Nel Duecento Firenze era una città magnanica piena dei torri privati di magnati e di famiglie grandi che riflettevano una società senza ordine e violenti conflitti interni.

Sotto il governo del Primo Popolo (1250-60), che segnò la vittoria di ricchi borghesi, i fiorentini promossero energeticamente le urbanistiche pubbliche — le mura d'Oltarno, Ponte S. Trinita, chiese-conventi dei ordini mendicanti — e costruirono il nuovo simbolo di potere: Palazzo del Capitano del Popolo (oggi Bargello).

Dal 1280 al 1330, Firenze realizzò l'ultima espansione urbana sotto il governo del Secondo Popolo (governo delle Arti e del *popolo grasso*). Firenze era ormai la città più grande e più potente in Toscana e cambiò radicalmente la sua fisionomia urbana costruendo i due monumenti giganti: il più grande palazzo comunale (Palazzo della Signoria, 1298-1314) e il più grande duomo (S. Maria del Fiore, 1296-1467) in Italia.

Oltre i due monumenti che simboleggiarono la potenza massima della città, il governo delle Arti costruì le ultime mura definitive (le *sesie mura*) e promosse i lavori di ingrandire ed abbellire lo spazio urbano (strade, piazze, chiese-conventi, palazzi privati ecc.). Fu l'epoca di Giotto e di Dante, il quale, condannato in esilio nel 1302, fece gli elogi dell'espansione miracolosa della sua città amata con i sentimenti amari.

ルネサンス文化の舞台となったフィレンツェは、中世後期の十三世紀—十四世紀に都市の基本構造が形づくられ、ルネサンス期の十五世紀—十六世紀に都市としてほぼ完成の域に達する。

その都市建設の歴史は、イタリア諸都市のなかでも未曾有の激烈な都市内抗争を経験したこの都市の政治的支配層が、さまざまなかの私的なパトロンを組織しながら都市建設を推進した過程であり、そのなかからメディチ家という一都市貴族が独裁者として台頭し、やがて君主化して、都市創造において決定的な役割を演じてゆく過程であった。換言すれば、それは、中世の都市コミュニティー共和制都市国家フィレンツェが「メディチ家の宮廷都市」へと変貌してゆく歴史であったといえる。

L・マンフォードは、「中世都市」や「バロック都市」は存在しても、「ルネサンスの都市」というものは存在しない」と述べている(『歴史の都市 明日の都市』)。しかし、フィレンツェという都市を見れば、それが中世都市を基盤としながら、そこに十五世紀の寡頭制共和国を担った都市貴族層と十六世紀の専制君主化したメディチ家の権力を視覚化した公私の建造物によって新しい偉観をつけ加えた「ルネサンス都市」であることがわかる。

建築史の視点から見れば、十五—十六世紀のフィレンツェは、アルノルフォ・ディ・カンピオやヤコポ・タレンティの時代までのロマネスク・ゴシック的な中世都市に、ブルネッレスキ、アルベルティ、ミケロッツォ、ジュリアーノ・ダ・サンガッロ、アンマナーティ、ヴァザーリ、ブオンタレンティなどの建築家によるルネサンス様式の大規模なバラツツォ、教会堂、公共広場、宮廷

庭園がつけ加わり、規則性と水平性、開放性とモニユメンタリティを増したルネサンス的な都市空間へと変貌するのである。もちろん、十五世紀前半にブルネッレスキによって完成されたサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドームが十三世紀末に着工されたゴシック式の大聖堂の内陣と身廊のうえに建ち上げられたように、また中世の都市コミュニティーの象徴であるバラツツォ・デッラ・シニョリーアが十六世紀後半のコジモ一世時代にバラツツォ・ヴェッキオとして大増改築されたように、ルネサンス都市フィレンツェは中世都市フィレンツェと明確な連続性をもっている。

本論では、十五—十六世紀のルネサンス期の都市建設の前提となった中世フィレンツェ(十二—十四世紀)の都市建設の過程を概観することにした。

一 司教都市からコミュニティー都市へ

フィレンツェは、前五九年(あるいは前五〇年)にユリウス・カエサルによって植民都市カストルム(四八〇×四二〇メートル)として基盤目状の幾何学プランで建設された古代起源の都市(古名フロレンティア Florentia)である(図1)。五—八世紀のビザンティン帝国とランゴバルド王国の諸公の支配時代に衰退をたどった後、フランク王国の伯領および司教領の拠点となった九世紀から復興が始まり、ヨーロッパ中で「商業の復活」が起こる十一世紀には、ピサ、ルッカ、シエナに続いてトスカーナの主要都市のひとつに成長する(人口二万人)。

中世後期——十一世紀から十四世紀にかけて——のフィレンツェの都市建設は、大きく分けて四つの段階をへて推進された。

第一段階は、十一世紀後半の司教ゲラルドゥスとマティルダ女伯の時代である。

この時代のフィレンツェの都市権力は、他のトスカーナの主要都市と同様、聖俗の二大封建権力である伯と司教によって二分されており、都市建設も両者の主導下に進められた。十一世紀中頃にクリュニー修道会出身の教会改革派の聖職者ゲラルドゥス(後の教皇ニコラウス二世)が司教に就任すると、その指導下に市内の八つの主要な教会堂——司教座聖堂のサンタ・レパラータ聖堂 S. Reparata、サン・ジョヴァンニ洗礼堂 Batistero di S. Giovanni、サン・ミニアト聖堂 S. Miniato al Monte、サンティ・アポストリ聖堂 SS. Apostoli、サン・ピエル・スケラツジョ聖堂 S. Piero Scheraggio——の改築と建設が始められた。

一方で、一〇五七年にトスカーナ辺境伯の行政拠点が正式にフィレンツェに置かれると、伯位を継承したマティルダ女伯(在位一〇六九—一一一五年)は、都市の発展に対応すべく、古代のカストルムの規模を初めて上まわる第四市壁(Danteが「いにしへの市壁 *caerchia antica*」と呼んだ市壁)を建造した(一〇七八年以後)。

当時のフィレンツェは、司教と伯の権力を体现する二つの建築物——司教館およびそれと隣接する辺境伯の館——を中心として、主要な宗教建築物がロマネスク様式に衣替えを始めた小規模な封建都市であったが、とりわけこの時期のフィレンツェに新しく生まれた都市的自意識を典型的に示すのがサン・ジョヴァンニ洗礼

堂である(図2、3、4)。古代のマルス神殿の跡に建てられていた初期キリスト教時代の洗礼堂にかわって、約一世紀(一〇五九—一一一〇年)をかけて都市再興の象徴として建造された八角堂プランの洗礼堂は、ローマのパンテオンやラテラーノ洗礼堂、アーヘンの宮廷礼拝堂を意識して構想されたもので、通常のロマネスク様式の枠を超えるその厳格な古典的・合理的デザインは、古代ローマの政治的・文化的・宗教的権威(*romania*)の継承者としての自覚を明確に表明している(洗礼堂は、一一二八年に司教座がサンタ・レパラータ聖堂に移されるまでは、*duomo-cattedrale*の機能を担っていた)。

二 コムーネ都市の発展

フィレンツェが帝権とトスカーナ辺境伯から自由なコムーネ(自治都市)として独立を宣言するのはマティルダ女伯が死去した一一一五年のことであるが(神聖ローマ皇帝からの公式の独立許可は一一八三年)、これを機にフィレンツェは十二世紀と続く十三世紀に都市の大発展の時代を迎える。

都市の発展を主導したのは、トスカーナ辺境伯からコムーネ権力を樹立する過程で功績のあつた都市貴族(下級の旧封建貴族や農村から移住してきた小領主、早くから彼らと同化した一部の大商人からなり、「ノービリ *nobili*」)「グランディ *grandi*」「マニヤルティ *magnati*」などと呼ばれた)と経済の急成長を担った商人層であった。

フィレンツェ商人たちは、他のイタリア都市の商人たちと同様、ヨーロッパ各地に進出して、活発な商業活動を展開し、都市内で

の政治的発言力を強めた。彼らはフランドルやシャンパーニュの定期市で羊毛の原毛や生地を買い付け、それをフィレンツェで染色・加工して高級織物として再輸出し、大きな利益をあげた。また、この利益を各地の聖俗の権力者に高利率で貸し付ける金融業で巨大な利益を獲得する。彼らは一一五〇年頃に商人組合(ソキエタス・メルカントウム、後のカリマラー組合)を結成して結束を固め、続いて一二〇六年に銀行組合(両替組合)、一二二二年に羊毛組合(毛織物製造組合)、一二二八年にボル・サンタ・マリア組合(絹織物組合)を結成。遠隔地商業、織物産業、金融業は早くから不可分に結びついて急速な発展を遂げ、十三世紀半ばまでにフィレンツェはヨーロッパ第一の商業都市に躍進するのである。一二五二年にフィレンツェで鑄造され、「中世のドル貨」として流通したフィオリノ(フローリン)金貨は、中世後期のヨーロッパ経済におけるフィレンツェの卓越した地位を物語っている。

一方、粗暴で好戦的な封建貴族や騎士を中心とする貴族層は、商人階級に対抗して「ソキエタス・トゥリウム *Societas Turrim*」(塔仲間)を形成して結束しながら、都市軍にその中核をなす騎兵団を提供して軍事的指導権を揮い、また外交使節や官職者として外交・司法・行政において活躍した。

初期コムーネ時代のフィレンツェは当初コンソレ制(貴族と大商人から選出された十二名のコンソレが一年任期で統治し、これを手工業者を代表する百人の代表市民と全市民総会が補佐する)をとり、一一九三年からはポデスタ制(近隣都市の貴族から選ばれた一年任期の行政長官ポデスタに裁判権と警察権を委ね、これを二つの評議会が補佐する)に移

行するが、いずれも都市内で主導権を争い合う二つの階級の均衡を図ろうとする制度であった。

十二世紀フィレンツェの最初の本格的な都市拡張を示すのは、一一七三年―七五年に行われたコムーネ独立後の最初の市壁建設である。この第五市壁建設(古代の都市市壁から数えて)は、古代ローマ以来の都市の南北の軸線(カルド *cardo*)に対して四五度の角度をもつてアルノ河を越えてオルトラルノ地区まで拡大され、従来の約三倍の面積(九七ヘクタール)を包摂する画期的なものであった(図5)。

三 塔の町フィレンツェ

第五市壁の建設から最終市壁の第六市壁の大拡張までの約一世紀半の都市建設は、都市貴族間における激的な党派抗争、そしてこの旧支配層と経済活動の発展により急速に発言力を増した商人階級との複雑な政治闘争がからみあう、稀にみる社会的激動のなかで進められた。

この時期――十二世紀末から十四世紀初め――の都市建設は三つの時期に分けられる。第一期は、コムーネ権力がまだ弱体で都市の支配層であった都市貴族たちの私塔が乱立していた時代、第二期は、大商人階級の台頭による第一次平民政府(プリモ・ポーポロ)の確立によって都市共同体としての自覚が高まり、都市建設において新しい秩序の形成がはじまった時代、そして第三期は、大商人階級が主導する第二次平民政府(セコンド・ポーポロ)の樹立に

よって、飛躍的な都市拡張と、政庁館および新しい大聖堂を核とする大々的な都市建設が都市をあげて推進された時代である。

十二世紀—十三世紀前半のフィレンツェ（人口約三万人）は、長い衰退期のあいだになし崩し的に変形され細分化された古代ローマのカストルム構造（基盤状の都市プラン）の中心部に、都市支配層の家屋や私塔が密集して林立し、その周辺に商工業者の新居住区（ボルゴ *Borgo*）が不規則にひろがる、無秩序で非機能的なマグマ的都市であった。固定した市庁舎（パラッツォ・コムナーレ *palazzo comunale*）はいまだ存在せず、新旧二つの市場—旧市場（メルカー・ヴェッキオ *Mercato Vecchio*）は古代のフォルム跡に造られる—と穀物市場（のちのオルサンミケーレ *Orsanmichele*）以外には計画的に造成された広場やロτζジアもなかった。

都市内で専横的な権力をふるった都市貴族たちは、都市の中心部に高い塔をそなえた館を次々に建て、互いの勢力を張りあつた。住居機能をもたず、もっぱら軍事的用途と勢力誇示の目的で造られた私塔は、元来農村地域に建てられた封建領主の砦や物見の塔を都市内に持ち込んだものであつた。彼らは、互いに塔の高さを競い合い（たとえば、メルカート・ヴェッキオに建つトシンギ家の塔は七十五メートルにも達した、また近隣の一族どうしが朋党 *コンソルテリヤ consorteria*）を形成して、一定の区域を複数の塔と家屋群によつて「島」のように占有した（図6）。たとえば、ウベルティ家の塔と家屋群はシニョリア広場となる区域一帯を、アミデイ家の塔と家屋群はボルゴ・サンティ・アポストリ一帯を占有していた（図7、8、9、10、11）。

メディチ家が新興の都市貴族としてフィレンツェの歴史に登場するのは十三世紀初めのことであるが（二二六年にポーナジュンタが評議会議員として初めて記録に登場）、おそらく近郊の農村ムジエツ口の小領主ないし下級の封建貴族の出身であつた初期のメディチ一族も、メルカート・ヴェッキオの東側にテッラ・トーザ家と塔仲間を組んで三つの塔と家屋群、ロτζジアを構えていた（図12）。

私塔は、十一世紀末にわずかに五基にすぎなかったが、十二世紀末には百を越え、十三世紀末には二五〇を数えるまでに激増する（図13）。L・マンフォードが「社会病理学の一兆候」（『都市の文化』）と呼ぶこうした塔の乱立は、他のイタリア諸都市にも共通する現象だが（現在でもパヴィーア、サン・ジミニアーノ、ポローニヤ等にはその一部が残存している）、その急増ぶりはフィレンツェにおいては特に著しく、この都市の急膨張と支配層の異常なまでに激しい群雄割拠を物語つてゐる。

都市貴族間の対立は、都市を二分するゲルファ党（教皇党）とギベッリーナ党（皇帝党）の血なまぐさい抗争に発展し（二二六年以降）、塔の建造ラッシュの一方で、両派による敵方の建物の破壊、財産没収、追放がくりかえされた。

四 第一次平民政府下の都市建設

しかし、粗暴な封建的都市貴族の専横的な支配を象徴する「塔の町」フィレンツェは、十三世紀後半になると、新興の商人階級の利益を反映するより強力な都市権力によつて統御された新しい

秩序の形成にむけて模索をはじめ。

封建的な都市貴族たちの非生産的な権力闘争に対して、地区組織(ポーポロ)やアルテ(軍事力を備えた同職組合)に結集して自己を防衛していた商人階級は、一二五〇―六〇年にグエルファ党貴族と連携して第一次平民政府(フリモ・ポーポロ *Primo Popolo*)を樹立した。この新政権は、党派を問わず、すべての私塔の高さを五〇ブラツチャ(約二九メートル)に制限し、新しい都市権力を体现するカピターノ・デル・ポーポロ館 *Palazzo del Capitano del Popolo* を建造する(都市の二十の地区にポーポロを基礎にした軍事組織の長官の館、一二五五―六〇年)(図14、15)。のちのパラッツォ・デッラ・シニョリアアのプロトタイプとなるこの最初の本格的な公館(一二六一年からはポデスタ館)は、高さ一〇〇ブラツチャ(五七メートル)の塔をそなえた要塞型の建物で、一律の高さに制限された私塔の上にそびえるその偉容は、「ポポラーニ *popolani*」と呼ばれた上層商人階級の最初の勝利を象徴するものであった。

新政権はまた公共的な都市建設を積極的に推進した。オルトラルノの市壁を大幅に拡張し、古くからのヴェッキオ橋 *Ponte Vecchio*、カッライマ橋 *Ponte alla Carrara* (一二八―二〇年)、ルーバコンテ橋 *Ponte Rubaconte* (のちのグライツィエ橋 *Ponte alle Grazie*、一二三七年)に続くアルノ河の四番目の橋として、サンタ・トリニタ橋 *Ponte S. Trinita* (一二五二年)を建造する。アルノ兩岸地区に発展した毛織物産業を促進し、都市のいっそうの機能化をはかるためである。

農村からの流入者や底辺労働者として毛織物産業に従事する貧

困層がますます増加して市壁外のボルゴ地区が拡大すると、慈善や福祉活動の必要性から各種の托鉢修道会が進出し、都市空間の新しい核をなしてゆくが、都市政府は、こうした托鉢教団の建設事業にも積極的に協力し、支援するのである。

二大托鉢教団のドミニコ会(サンタ・マリア・ノヴェッラ *S. Maria Novella*、一二二二年)とフランシスコ会(サンタ・クロッチェ *S. Croce*、一二二六年)のフィレンツェ定着を皮切りに、聖母マリア下僕会(サンティッシマ・アヌンツィアータ *Ss. Annunziata*、一二四八年)、アウグステイヌス隠修士会(サント・スピリト *S. Spirito*、一二五〇年)、ウミリアーティ会(オニサンティ *Ognissanti*、一二五一年)、カルメル会(サンタ・マリア・デル・カルミネ *S. Maria del Carmine*、一二六八年)が次々に定着し、十三世紀後半から大規模な修道院・聖堂・広場の複合体の建造に着手する。都市政府は、そのために土地の提供や財政援助をおこない、とりわけドミニコ会のサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院・聖堂とフランシスコ会のサンタ・クロッチェ修道院・聖堂に関しては、都市の最も重要な公共事業として積極的な支援を推進するのである。

五 第二次平民政府下の都市建設——ダンテとビエットの時代

フィレンツェの都市建設が飛躍的な大発展を遂げるのは、第二次平民政府(セコンド・ポーポロ *Secondo Popolo*)が樹立された一二八二年から一二三〇年代にかけての約半世紀間のことである。

喜へ、フィレンツェよ、

おまえはかくも偉容を誇り

その翼は海と陸をおおっている、

おまえの名は地獄にもどろいている！

Godi, Fiorenza,

poi che se si grande

che per mare e per terra banti l'ali,

E per lo' inferno tuo nome si spandei

と、ダンテが『神曲』「地獄篇」(二十三歌)でうたったのは、この時代のことである。

七大組合に結集した大商人階級(ポロポロ・グラッソ *popolo grasso*) は、中小の手工業者(ポロポロ・ミニート *popolo minuto*) の支持のもとに、第一次平民政府崩壊後の旧貴族層との闘争に最終的な終止符をうち、アルテ(同職組合)選出の複数のプリオーリ(最高執政官)によって都市を統治する共和体制を確立(二二八三年)。一五三二年のフィレンツェ公国成立まで二五〇年にわたって継続するこの新しい政治体制の誕生(二二九三年の「正義の規定」)によって法制的に確定される)によって、新しい都市共同体意識は未曾有の高まりを示し、トスカナ第一の都市国家にふさわしい規模と偉観をそなえた都市の建設が開始されるのである(図16)。

第二次平民政府が推進した一大都市建設事業は、新市壁の建造、新しい政庁館と大聖堂の建築、そして都市全体の整備におよぶ画期的なものであった(表A)。

十三世紀を通じて、激的な都市内抗争にもかかわらず国際的な商業・金融業と織物産業によって驚異的な経済成長を遂げたフィレンツェの人口は、一二八〇年代には約八万五千人(第五市壁建造時の約三倍)に達していたが、新政府は、まず市壁の大拡張を計画し、一二八四年に着工した。工事は度重なる中断をはさんで、半世紀後の一三三三年に完成する。この最終市壁は、全長八・五キロメートル、第五市壁の約六・五倍の六三〇ヘクタールの都市面積を取り囲むもので(将来の人口増加と都市発展を予想して緑地帯や農地を広く取り込む)、十九世紀までのフィレンツェの都市規模と構造を確定するものであった。

都市の防衛上の最重要課題である市壁の建造と平行して新政権が着手した都市の二大シンボル——大聖堂と新政庁館——は、トスカナ最大の都市となったフィレンツェにふさわしい空前のスケールのモニユメントとして構想された。

小規模なロマネスク式のドウオーモ、サンタ・レパラータ聖堂にかわってアルノルフォ・ディ・カンピオ(二二四五—一三二〇年頃)により設計された新しい大聖堂(のちにサンタ・マリア・デル・フィオーレ *S. Maria del Fiore* と改名)は、ライヴァル都市のピサとシエナの大聖堂を凌駕することが意図され、サンタ・レパラータの約二倍の全長と三倍の面積をもつゴシック式聖堂として計画された(この計画案は一二三七年にさらに拡大され、全長一七五メートル、翼廊幅九〇メートル、身廊幅三九メートルの当時のイタリアで最大の規模となる)(図17、18)。新しい大聖堂の建造は、一二九六年の着工から数度の中断を経て一四三六年のドームの完成、そして一四六七年度の頂

塔の完成まで一七〇年以上にわたる全都市的事業として続行されるが、この間、一三三四年にはジョット(二六六頃—一三三七)の設計になる華麗な鐘塔 Campanile di Giotto (高さ八四・七メートル)が着工され、一三五九年に完成する(図19、20)。

一方、カピターノ・デル・ポーボロ館にかわる新しい都市権力の拠点である政庁館(当初パラッツォ・デイ・プリオーリ Palazzo dei Priori のちにパラッツォ・テッラ・シニョリア Palazzo della Signoria)は、一二九八年に着工されると、政治的要請から急ピッチで工事が進められ、一三二四年に竣工する(図21、22)。建設地は、ギベツリーナ党の門閥ウベルティ家の破壊された塔館群があつた一帯で(図23)、地元産のピエトラ・フォルテ(硬質褐色砂岩)の粗石積みによる威圧的な要塞型のパラッツォと塔(九五メートル)は、新体制の都市国家フィレンツェの力を圧倒的に誇示するものであつた。政庁館前ではシニョリア広場の整備・拡張と舗装が進められ(一三〇七—四二年)、一三七六—八一年にはそこに古代ローマ風の巨大な半円アーチを架した国家の儀典場ロツジア・デイ・プリオーリ Loggia dei Priori (現在のロツジア・デイ・ランツィ Loggia dei Lanzi)も建設された(図24)。

これらの大事業と平行して、都市政府が推進したのは、従来の非機能的で無秩序に密集した都市構造を改造し、拡大した都市空間のなかで中心部と新しい市門や周辺部を有機的に結びつけ、都市に新しい公共性と機能性を与えることであつた。このために都市政府は、法令によつて旧貴族(マニヤーティ)による市中心部の土地の私的な占拠に規制を加え、また個人や僧院によつて占有さ

れていた市の不動産を回収して、新しい主軸街路の開設(スカール通りなど)、旧街路の直線化と拡幅、街路の舗装、広場の拡張と整備、アルノ河岸道(ルンガルノ)の整備など、全面的な都市の整備と美化の事業を推進するのである。

とりわけ、大聖堂と並んで大規模なゴシック式聖堂の建造が進められていたドミニコ会のサンタ・マリア・ノヴェツラとフランシスコ会のサンタ・クローチエ(一二九五年、新聖堂に着工)の聖堂—修道院—広場の複合体(図25)は、一三四三年以降、サン・ジョヴァンニ洗礼堂およびアルノ西岸のサント・スピリト聖堂とともに、都市の四つの街区(クアルティエーレ *quartiere*)の核としての都市的—宗教的機能を担つていくのである。

六 都市的パトネージの構造

このように、十三世紀末から十四世紀にかけて、新市壁の建設によつて飛躍的に拡大したフィレンツェは、大聖堂と政庁館を都市の絶対的な中心とし、主要な托鉢修道会の聖堂—僧院—広場を地区的な核とする統一的多中心的な都市の構造を形成していくのであるが、こうした画期的な都市建設の過程で主導的な役割を演じたのは都市政府(シニョリア)とそれを支える主要アルテであつた。実際に聖俗の公共建築事業を推進し監督したのは、各事業ごとに設置された造営委員会 *Opere* であり(「オペラ *Opus Operai* は本来「事業」やそのための実務管理機関を指す)、この委員会は建築事業が行われる教区や旗区の有力市民によつて構成

されたが、聖堂や修道院の場合にはその院長や参事会員も合議の場に加わった。このためオーペラと院長・参事会側との意見が対立する場合もしばしば見られたが、しだいに主要な出資母体であるオーペラの側が発言権を強めるようになった（「オペライオ *operatio*」と呼ばれた造営委員の構成や任期は変動的で、一般に三〜六人からなり、任期は通常一年であったが、任期はしばしば延長された）。

こうした有力市民を中心とする実務機関の設置によって、教区・旗区の市民からの資金調達を円滑化することができたが、大聖堂の建造のような長期にわたる全都市的事業のためには特別の常設の造営局（オーペラ・デル・ドゥオーモ *Opera del Duomo*）が創設された。この造営局には、着工当初は司教や司教座聖堂参事会員も参加していたが、一三二〇年代からは構成メンバーは主要アルテの代表のみに限定され、さらに最初の計画案が拡大された一三三一年からは羊毛組合に全責任が委託される。やがてこの大聖堂造営局は、都市政府の一種の「建築庁」として、他の主要な公共事業（鐘塔、ロτζジア・テイ・プリオーリの建造、シニョリア広場の整備）をも監督するようになった。一方、最も古い有力アルテのカリマール組合は都市の最も由緒のあるモニユメントであるサン・ジョヴァンニ洗礼堂のオーペラの運営に責任をもち（十四世紀末からはサンタ・クロッチェ聖堂やサン・ミニアト聖堂のオーペラをも担当）、もう一つの主要アルテ、ポル・サンタ・マリア組合（絹織物組合）はオルサンミケレ穀物倉庫兼祈禱堂の造営を担当した（この担当はのちにグエルファ党に引き継がれる）（図26）。

十三世紀末から十四世紀のフィレンツェでは、以上に見たよう

に、都市政府をはじめとして、富裕な大ギルド、教区、旗区組織が重層的に連携しあつた集団的なパトロネージが主導性を発揮し、こうした都市的パトロネージからヨーロッパ最大の経済力を持つ商業都市フィレンツェの都市建設のめざましい活力が生み出されたのである。

その一方で、指導層をなす有力市民たちは新しいタイプの私邸の建造にも着手する。

従来の十三世紀前半までの都市支配層の住居は、古代のインスラが変形した高層の家屋とそれに隣接する塔であり、公共的美観の意識を欠いたものであったが、第一次平民政府の政策で私塔の高さが制限されると、塔は住居機能をもつ塔館（*casatorta*）に変えられ（一階は工房や商店として、上階は倉庫として使用）、十三世紀後半から十四世紀にかけては新しいタイプのより大規模な要塞型の館（パラッツォ・フォルテツァ *palazzo-fortezza*）が出現する。後世の改修によつて原形をとどめる建築例は少ないが、アッチャイウオーリ、アルベルティ、アルビッツィ、アルトヴィーティ、アレツサンドリ、モッツィ、ブオンデルモンテ、カヴァルカンティ、チェルキ、ジューニ、デッラ・ルーナ、カステッラーニ、フレスコバルディ、スピーニ、ルツジェリーニ、ベルツィ、ジャンフィリアツィ、ベツォーリ、ジャンドナーティ、バルドヴィネッティ、パツィ、ルステイチ、サルヴィアーティ、ダヴァンツァーティ（元ダヴィツィ）（図27）などの館がそれである。これらの邸館の特徴は、塔館の類型を留める垂直性をつよい四層から六層のファサードをもち、一族の館が隣接して建ち並ぶ場合が多かったが、

道路や広場に面したファサードには都市の美観と公共性を意識した統一的で規則的なデザイン(アーチ状の扉口や窓の形態、各階の分節、石積み法の統一)が採用された。私的建築も都市の公共的な景観の一部をなすことが自覚されはじめたのである。

〔付記〕

十二世紀—十四世紀のフィレンツェの都市建築の発展を素描した本稿は、東京大学出版会から近刊予定の「都市・建築・歴史」シリーズ(全十巻、鈴木博伊藤藤巖山修武、山岸常人〔編〕)の第五巻『近世都市の成立』に所収予定の論文「建築パトロンとしてのメディチ——十五世紀フィレンツェにおける都市建設と建築パトロンナーシ」の序章をなす予定で執筆した草稿を分離し、独立させたものである。本稿の内容は、拙稿「十三世紀におけるフィレンツェの都市建設」(『日伊文化研究』21号、日伊協会刊、一九八三年)と一部重複している。紙幅の關係か、へて省略し、図版および表は次号に一括して掲載する予定である。以下、参照した主要 献(著者アルファベット順)を列挙しておく。

- VV. AA. *Alle origini di Firenze. Dalla preistoria alla città romana* (Firenze, 1997).
- G. A. Brucher, *Renaissance Florence* (New York, London, Sydney, Toronto, 1969).
- G. Fanelli, *Firenze architettura e città*, 2 vols (Firenze, 1973).
- G. Fanelli, *Firenze* (Roma-Bari, 1980).

R. A. Goldthwaite, *The Building of Renaissance Florence: An Economic and Social History* (London, 1980).

R. Goy, *Firenze: the city and its architecture* (London, 2002).

E. Guidoni, *La città dal medioevo al rinascimento* (Roma-Bari, 1981).

E. Guidoni, *Storia dell'urbanistica. Il Duecento* (Roma-Bari, 1991).

E. Guidoni, *Firenze nei secoli XIII e XIV* (Roma, 2002).

E. Macci, V. Orgera, *Architettura e civiltà delle torri: Torri e famiglie nella Firenze medievale* (Firenze, 1994).

G. Andes, J. M. Hunisak, A. R. Turner, *The Art of Florence*, 2 vols (New York, 1988) [佐々木英也・森田義之翻訳監修『フィレンツェの美術』上・下、日本放送出版協会、一九九一年]